

大学生の卒業研究時における内発的動機づけについて

—学生生活の側面から—

幼児教育選修 丹羽岬

1. はじめに

4年生となり自身が卒業研究に取り組む中で、卒業研究時における内発的動機づけは、個人差が大きいことを感じた。そしてその内発的動機づけの個人差は、どこから生じるのか疑問に思った。単に個人の性格や考え方の違いのみが、このような個人差を生み出しているのだろうか。確かに個人の性格や考え方といった内的要因が内発的動機づけに大きく関わっていることは間違いないと思われる。しかしその他にも、卒業研究の内発的動機づけの高低を左右する外的要因が、身近な生活の中に潜んでいるのではないかと私は考えた。

そこで、卒業研究時における学生の内発的動機づけについて調査し、内発的動機づけの個人差はどのようにして生じるのか、学生生活の側面に注目して明らかにすることを本研究の目的とする。

2. 現代の大学生と卒業研究

過去に橋本¹⁾が行った研究では、大学生の卒業論文作成時における自己認知について調査し、卒業論文作成時に学生が感じるストレスについて明らかにしている。この調査では、1月中旬に卒業論文を提出予定の大学4年生31名を対象に、7月と12月の2度にわたって質問紙調査を実施した。卒業論文作成が現在抱えるストレス源のうち最大のストレス源であると報告した者の人数は、7月時調査では13名であったのに対し、12月時調査では21名であった。この結果から、卒業研究は学生にとって大きな負担になると捉えられる。

しかし2009年に読売新聞社が行った「大学の実力 教育力向上の取り組み」調査では、全体の51%の大学が全学で卒業論文を必修としており、全く実施していないという大学は国立ではゼロという回答を得た(読売新聞, 2010年3月19日)。この結果から、現在、大学卒業に際して卒業論文を課すことはかなり一般的であるといえる。それは卒業論文に、何かしらの意義を見出しているからではないのだろうか。白井・高橋²⁾は卒業論文について、「専門の学びをとおして『問い』を立ててみずからに発し、その『答え』を自分で見つけること」「大学4年間の学びの集大成が卒論だ」と述べており、卒業論文や

それを作成する全ての過程を含めた卒業研究は、学生にとって重要な意味を持つことが窺える。

3. 内発的動機づけとは

動機づけとは、行動を始発させ、目標に向かって維持・調整する過程・機能である。人が行動を起こしている場合、その人には何らかの動機づけが作用していることが考えられる。内発的動機づけの定義は研究者によって様々であるが、本研究では吉田³⁾の言葉を借り、内発的動機づけを「『自律性』を持ち、当該活動自体を目標とし、その活動に従事することが“快”であり、課題を達成すれば、有能感を生じさせる動機づけ」とする。

4. 調査方法

アンケート調査

①調査対象

本学(愛知教育大学)の教員養成課程に在籍する、現在卒業研究に取り組んでいる4年生。
配布152部、回収115部、回収率75.7%
有効回答数114部

②調査日

平成26年11月下旬～12月上旬

③調査内容

フェイスシート(選修・専攻、性別、希望進路)

A 学生生活に関する調査

- ・ゼミナール決めの方法、満足度、問題点
- ・テーマ決めについて
- ・卒業研究と進路、選修(専攻)との関係
- ・学業、サークル活動、アルバイトなど、学生生活での優先順位

B 卒業研究時における内発的動機づけ測定調査

桜井・高野の「内発的—外発的動機づけ測定尺度の開発」⁴⁾で提示された質問形式の測定尺度を用いて、内発的動機づけを測定する。質問は全てで30問あり、二者択一の形式となっている。

5. 調査結果

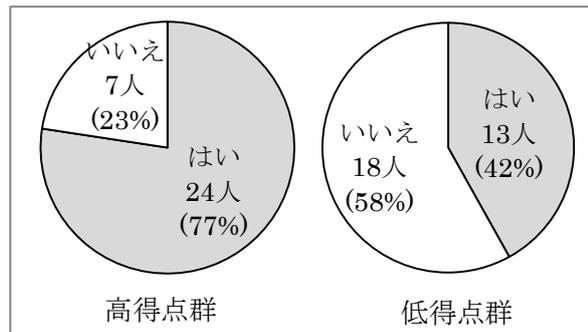
調査Bで得られた結果から内発的動機づけを得点化し、内発的動機づけの高い上位31名を「高得点群」、

内発的動機づけの低い31名を「低得点群」として比較を行った。

なお、30点満点で最高得点は30点、最低得点は1点、平均点は16.53点であった。

(1) 進路・選修（専攻）と卒業研究

今取り組んでいる卒業研究が、希望している進路先と関係がある分野かという質問をしたところ、以下の図のような結果が得られた。【図1】



【図1】比較—進路先と卒業研究の関係—

低得点群は高得点群と比較して、進路先と卒業研究とは関係がないと回答している学生の割合が高い。本学は教育大学であるため、当然ほとんどの学生が教育に関わる卒業研究に取り組むことになる。低得点群では保育職・教職以外を希望する学生が多くこのような結果になっているのではないかと考え、希望する進路先を比較してみたところ、以下の表のような結果が得られた。【表1】

【表1】高得点群・低得点群の進路先

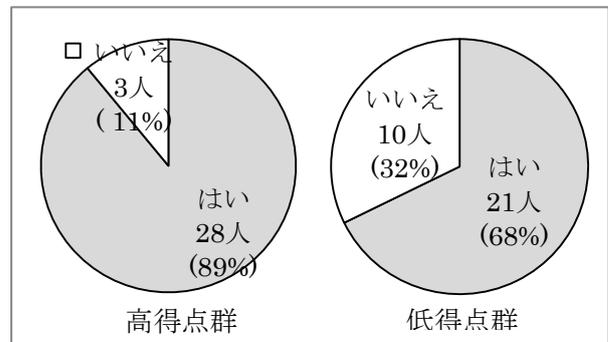
	保育職・教職	その他
高得点群	24人	7人
低得点群	24人	7人

高得点群と低得点群の間に差は見られない。つまり、低得点群の中には保育職・教職を希望しているにも関わらず、進路先と卒業研究を関係付けて捉えていない学生が多い。保育職・教職を希望している学生が必ずしも進路先と卒業研究を関係付けて捉えているとは限らず、「保育職・教職を希望している=内発的動機づけが高い」とは言えない。

それでは【図1】のような差はどこから生じるのであろうか。要は個人の意識の問題であると筆者は考える。実際の進路先がどうであれ、「進路先と卒業研究を関係付けて捉えられるか」が問題であり、高得点群は関係付けて捉えているが、低得点群は捉えていない。進路先と卒業研究の関係付けができていな

い場合、「卒業研究は将来役に立たない」などといった負の思考に繋がり、内発的動機づけを低くする要因になっているのではないだろうか。

また、今取り組んでいる卒業研究が、大学で学んでいる分野と直接的な関係があるかという質問をした結果を以下に記す。【図2】

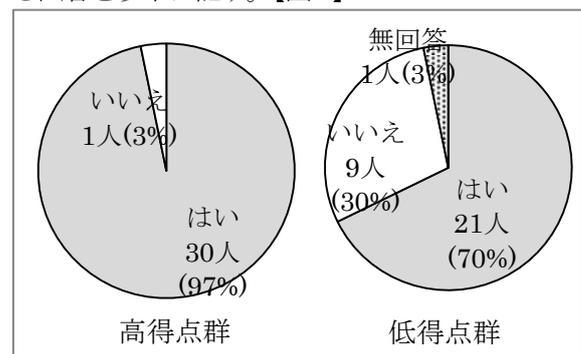


【図2】比較—選修（専攻）と卒業研究の関係—

大学生活の中で主に学んできたはずの選修（専攻）と異なる分野の卒業研究に取り組んでいるということは、選修（専攻）の範疇で積極的に深めたいと思えるテーマが見付からなかった、あるいは選修（専攻）自体に興味がなくなり、何を研究して良いのかわからない、といった場合も考えられ、これも内発的動機づけを低くしている要因ではないかと思われる。

(2) 研究テーマ

研究テーマについて、「今取り組んでいる卒業研究は、自分のやりたいテーマですか」という質問に対する回答を以下に記す。【図3】



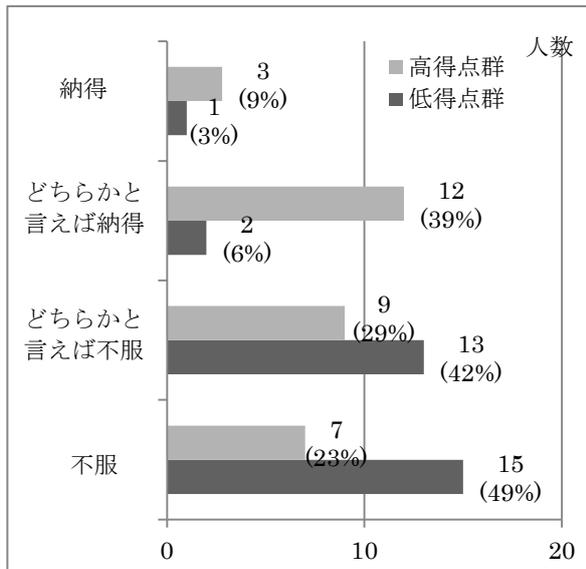
【図3】比較—研究テーマ—

高得点群が1名を除き自分のやりたいテーマを見つけ取り組んでいる一方で、低得点群は約30%にあたる9名が自分のやりたいテーマで卒業研究に取り組めていない。研究テーマは卒業研究の柱となる要

の部分であり、いわば卒業研究の基盤であると言っても過言ではない。この基盤ができていない学生が低得点群には多い傾向が見られ、基盤作りの段階で既につまずいてしまったことで、その後の卒業研究への内発的動機づけ得点の低下を招いているのではないと思われる。

(3) ゼミナール

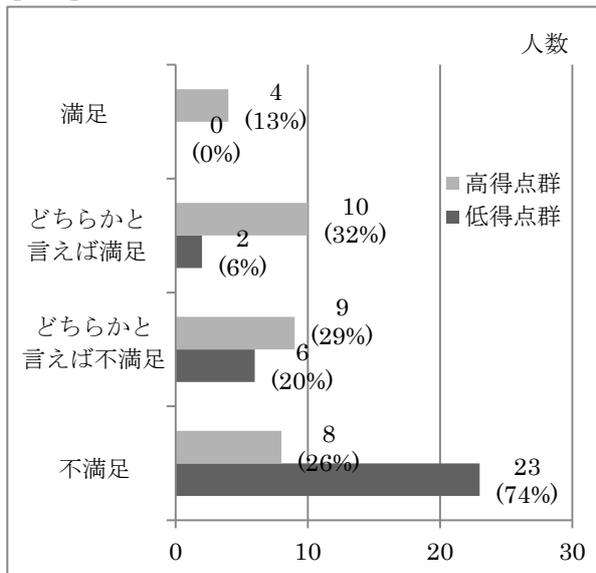
「①ゼミナール分けの方法は納得がいくものでしたか」という質問をした結果、以下の図のような結果が得られた。【図4】



【図4】比較—ゼミナール決めの方法—

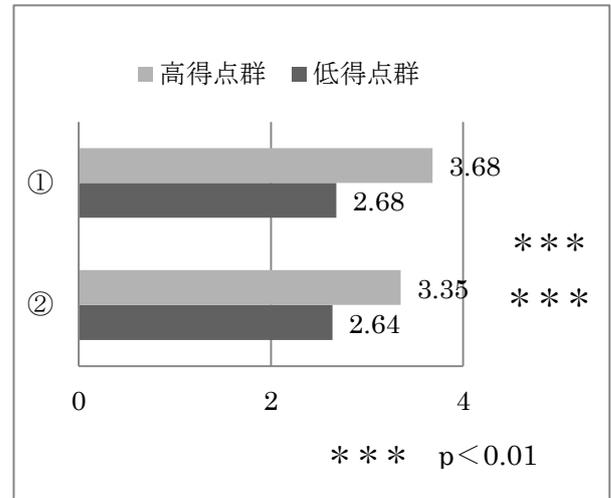
また、「②今所属しているゼミナールには満足していますか」という質問をした結果を以下に記す。

【図5】



【図5】比較—ゼミナールの満足度—

さらに、【図4】【図5】で得られた結果を基に、高得点群・低得点群それぞれの平均点を算出し、検定を行ったところ、以下の図のような結果が得られた。【図6】



【図6】t検定

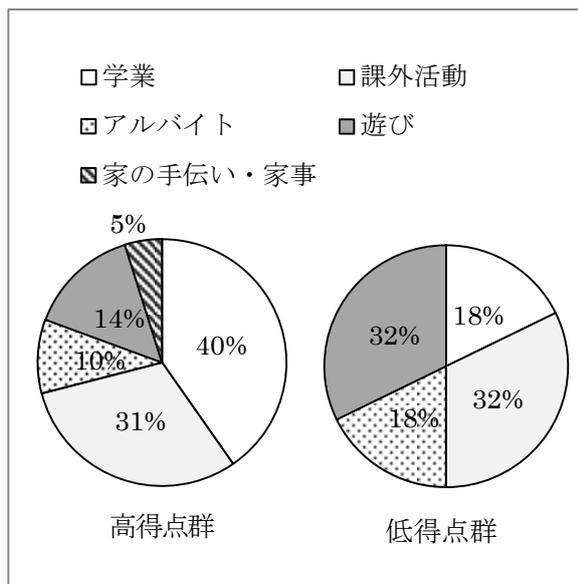
ゼミナール決めの方法に対する納得度・所属するゼミナールに対する満足度ともに、高得点群と低得点群で優位な差が見られる。

この結果から、ゼミナールが内発的動機づけに与える影響は非常に大きく、納得度と満足度は関連しており、ゼミナール決めの方法を不服と感じている学生は満足度も低いという傾向がある。ゼミナールに対し何らかの問題を感じている学生の内発的動機づけは、低くなる傾向があると言えよう。

また、ゼミナール決めの方法を詳しく見てみると、ゼミナール決めを「希望調査」で行った学生は納得度・満足度がともに高く、「面接・試験」「教員同士の話し合い」「GPA」「その他」と回答した学生は納得度・満足度が共に低い傾向が見られる。この結果から、「希望調査」は最も平等性の高い方法であると思われる。

(4) 大学生活での優先順位

「学業」「課外活動(部活・サークル・委員会・ボランティア等)」「アルバイト」「遊び」「家の手伝い・家事」の5つの項目に、1位から5位まで、優先する順に順位をつけてもらった。そして、1位(最重視)・2位(重視)を比較的重視している項目として、以下のような図を作成した。【図7】



【図7】最重視・重視事項

高得点群が「学業」と「課外活動」を比較的重視しているのに対し、低得点群は「課外活動」と「遊び」を比較的重視している。このことから、低得点群は高得点群よりも、学業を軽視し遊びを重視する傾向がある。学業の優先順位が低いということは、高得点群と比較して知的好奇心が薄い学生が多く、それが内発的動機づけ得点の低さに影響しているのではないだろうか。

6. 考察

まず、最も顕著な差の出たゼミナールについて述べる。調査の結果から、ゼミナール決めに「希望調査」で行った学生は、その他の学生よりもゼミナールに対する満足度が高く、内発的動機づけも高い傾向があることが分かった。この結果からも筆者個人の意見としても、希望調査は最も公平な方法であり、ぜひ取り入れて欲しいものである。

次に、選修（専攻）と卒業研究について、低得点群は、大学生活の中で主に学んできたはずの選修（専攻）と異なる分野の卒業研究に取り組んでいる割合が高かったことから、深めたいと思えるテーマが見付からなかった、あるいは選修（専攻）自体に興味なくなった、といった場合が考えられる。この、選修（専攻）に対する興味の薄さが、低得点群の大学生活における学業の優先順位の低さにも関係しているのではないだろうか。

本来大学は主に学業のために通うものであるが、そうではない風潮も広がっているように感じられる。痛烈な日本の大学批判をおこなった外国人による批

判の論点を、溝上⁵⁾は、「学生の勉強ぶりは、大学受験前に比べてずっと落ちるし、授業中の問題の掘り下げ方も甘く、普段の出席率も悪い。論文は、独創的・ひらめきを示すよりも、教えられたことに忠実なものが多い。勉強には興味も示さず、スポーツや趣味に熱中する学生も少なくない」とまとめている。

また、高校生の大学選択においても、世間一般的に「偏差値の高い大学が良い大学」というような風潮が感じられ、自分のやりたいことができる大学を選択する生徒がいる一方で、自分のやりたいことはともかく、とにかく偏差値の高い大学に入りたいという生徒も少なくないのではないだろうか。筆者の通っていた高等学校でも、とにかく国公立へ、偏差値の高い大学へ、という意識が強かったように感じられた。そういった生徒たちが、大学で学習意欲の薄い学生、選修（専攻）への興味の薄い学生、そして卒業研究に対する内発的動機づけの低い学生になっていく割合が高いことも考えられる。

こうした学生の学習意欲を高め、そして卒業研究にも内発的動機づけを高く持ってもらうため、大学教育や高校生の大学選択を見直していくべきであることを指摘したい。大学教育はともかく、高校生の大学選択については、個人の意思で改善していくことではないだろうか。各家庭によって経済状況などは異なり、大学選択の幅にも個人差があることは思うが、偏差値や知名度だけでなく、自分が4年間興味を持って学び続けられることで大学を選択すべきである。

引用文献

- 1) 橋本 京子 (2011)「大学生の卒業論文作成時の自己認知、および卒業論文作成状況に対する認知に関する実証的検討：卒業論文作成によって生じるストレスの側面から」京都大学大学院教育学研究科紀要 57: 489-502
- 2) 白井利明・高橋一郎 (2008)「よくわかる卒論の書き方」ミネルヴァ書房 P2-3
- 3) 吉田国子 (2009)「語学学習における動機づけに関する一考察」武蔵工業大学環境情報学部紀要 10:108-113 P111-11
- 4) 桜井 茂男・高野 清純 (1985)「内発的-外発的動機づけ測定尺度の開発」筑波大学心理学研究 7:43-54 P44-45
- 5) 溝上 慎一 (1996)「大学生の学習意欲」京都大学高等教育研究 2:184-197 P18